

日本看護倫理学会誌へ実践知を投稿する意味と価値

*The meaning and value of posting manuscripts as your phronesis
in Journal of Japanese Nursing Ethics*

大出 順¹ 中村 充浩²

Jun ODE

Mitsuhiro NAKAMURA

キーワード：実践知、論文投稿、価値

Key words : phronesis, posting manuscripts, value

1. はじめに

臨床に身を置いている看護職は日々さまざまな悩みや葛藤に苛まれている。「私はどう行動すべきだろうか?」「大切なのはどちらだろうか?」「何を優先したほうがよいのだろうか?」このような悩みや葛藤を解決するのに役立つのが看護倫理であり、看護倫理の知識や倫理的思考がこれらの悩みや葛藤をよりよい解決に導く。看護倫理の知識や倫理的な思考を学んだだけでは役に立たず、実践の学問である看護倫理は実践でこれを活用してこそ、その利益を享受できるのである。

しかし、この「知識を実践で活用するプロセス」はそのプロセスを進める当事者の思考過程でのみ存在するために当事者以外の目に触れることはない。この思考過程が可視化され共有されればその経験のない人でも解決策を導く一助となり、なにより実践知を蓄積することで看護倫理の発展にも大きく寄与すると考えられる。「看護倫理の成長を促す大事な要因に、『考える』『論じる』『対話』がある。この学会誌の「レター」はそのための場としてつくられた」と小西¹が述べているように、この倫理的思考プロセスの可視化と共有、蓄積には無限の可能性があり、その共有の場として日本看護倫理学会誌のレターが準備されているので

ある。

翻って日本看護倫理学会の会員数とレターの投稿数をみると、会員数の増加とは裏腹に投稿数は伸び悩んでいる(表1)。

本学会は、「看護倫理の知の体系化をめざし、看護倫理に関心をもつ実践者・研究者・教育者の交流を支援するとともに、看護倫理に関する政策提言を行うことを目的」としており、学会誌は知の体系化と実践者・研究者・教育者の交流の要と言っても過言ではない。その目的達成のためにもレターをはじめとする論文投稿数を増やすことは喫緊の課題である。

投稿数が伸び悩んでいる要因として、本学会の会員は臨床に身を置く実践者が多く、論文作成という特殊なプロセスに馴染みがない会員が多いことが挙げられるかもしれない。さらに、論文の投稿に馴染みがないと査読のプロセスがわからず自分の論文がどう扱われるのか不安を感じる可能性もある。そこで、投稿プロセスを可視化し、査読の過程で編集委員や査読者として投稿された論文にどう向き合っているのかを情報提供したい、また、看護倫理学では実践者が実践知を学会誌に投稿することにこそ意味や価値があることを示したい、さらに、投稿を考えている人の生の声を聞い

表1 会員数とレター投稿数の推移

	Vol. 1	Vol. 2	Vol. 3	Vol. 4	Vol. 5	Vol. 6	Vol. 7	Vol. 8
会員数*	220	414	583	675	671	799	835	860
レター投稿数	3	2	2	3	2	2	2	1

*会員数は日本看護倫理学会会務報告より引用

1 藤枝市立総合病院救急センター Emergency Center, Fujieda Municipal General Hospital

2 東京有明医療大学看護学部 Faculty of Nursing, Tokyo Ariake University of Medical and Health Sciences

て論文投稿の環境改善に役立てたいとの想いから、日本看護倫理学会第9回年次大会にて「文章を書いてみよう！論文を書いてみよう！学会誌に投稿してみよう！」という交流集会を企画した。本稿では、参加者から好評であった交流集会の内容をさらに広く知ってもらうために内容を再構築し、会場から出た意見とともに紹介する。

2. 投稿プロセスと編集委員や査読者の役割と思い

投稿された論文には編集委員会で担当編集委員と査読者2名が選定される。査読者は専門領域や研究履歴などを勘案して投稿された論文に適するように選択され、査読期間は3週間で2名の査読者から掲載可否や修正の有無やその理由、修正方法などのコメントが寄せられる。査読は二度まで受けることができ、最終的に編集委員会が掲載可という判定をした場合には晴れて学会誌に掲載される。査読のプロセスは、著者と査読者が互いに誰かわからないようにブラインドされて進行し、投稿から掲載までにかかる時間は約6~7カ月である。

本学会の査読ガイドライン²では、「査読の存在理由は、編集委員会と著者を助けること」で査読者は「審判としてではなく同僚として行動」することを求めている。さらに、「査読者と（編集）委員会は、出版と倫理基準の守護者」であることが明記されている。つまり、査読者や編集委員会は投稿された論文が学会誌に掲載されるにふさわしいかどうかを判断するだけの存在なのではなく、投稿された論文をいかに「よく」できるかを著者と二人三脚で考え、行動する「同僚」なのである。

このプロセスでの査読者の思いを筆者の査読者としての経験から述べる。一言で言うと、わかりやすい論文を書くことは難しいということである。査読者は、著者の書いた論文に真剣に向き合い精読し、どうすれば論文が多くの人にわかりやすく読みやすくなるかを考えながら査読を行う。著者の頭の中で考えた事象を文字に起こした論文は、査読者という他者の目を借りることでより新たな視点を得られ、複数人による精読という過程を経ることでよりわかりやすい論文が作り上げられていく。しかし、そのような過程を経て学会誌に掲載された論文でも、その内容の理解に苦しむ経験をした人は少なくないだろう。誰しも最初からわかりやすく理論的で魅力的な文章を書くことは難しい。論文を書くことに精通していない著者であればなおさらだろうが、査読者もまた同じ悩みを抱えていることもあり、査読という過程に関与する経験は査読者自身の勉強にもなっているのである。

田中³は「編集者は門番 (gatekeepers) である」と言われているが、むしろ新しい論文を社会に送る助産師であり、学問的な記録を守る人 (guardians) でもあ

る」とHamesの言葉を紹介している。交流集会では「編集者は著者の支援者である」ことを強調して述べた。確かに、編集者は著者の並々ならぬ努力によって世に生み出されようとしている論文を丁寧にそしてよりよいものとしてこの世に送り出す「助産師」と言えるだろう。投稿された論文がどのようなものであったとしても、編集者はその生みの過程に関わる者としての姿勢に変わりはない。そこには、私的な感情ではなく、純粹に著者と論文に向き合うという道徳観が必要だろう。著者と編集者、そして査読者の共同作業を経て生み出された論文は、もはや著者だけのものでもない貴重な学問の、世の財産となる。編集委員一同はその思いで著者の貴重な論文の編集に取り組んでいることを改めてお伝えしたい。

3. 臨床の声を学会誌に投稿することの意味と価値

交流集会では、本学会誌に掲載されたあるレター⁴の「価値」を編集委員それぞれに示してもらった。「日常的に遭遇する事例をテーマにしたこと」、「事例から『尊厳』や『QOL』を考察したこと」、「臨床の悩みや葛藤が投稿されたこと」、「同じ悩みを抱える臨床の人をエンパワーできること」などが価値として挙げられた。このレターは、臨床での著者の体験を論文にしたものであり、まさに、実践知を論文にしたものである。論文投稿という行動に結び付かなければ、この経験は著者の記憶の中で埋もれてしまう些細な出来事であったかもしれない。しかし、その経験を論文にしたことで、経験を他者の目に触れさせることができ、臨床で日常的に遭遇する生の声を同じような経験をしている仲間と共有することができ、さらに、読み手の異なる視点によってさまざまな「価値」を見いだすことができた。

冒頭でも述べたように、看護倫理は常に実践の中にある。ゆえに、その実践の積み重ねが看護倫理学という学問の構築につながると考える。もちろん、エビデンスに基づいた高度な統計論文や質的論文もその一翼を担うことは否定しないが、実践の学問である看護倫理学ではその人がその場所で体験した出来事にこそ学問的な価値が潜んでいるのである。臨床で起こる倫理的背景を抱えたさまざまな悩みはその一つひとつがオリジナリティに富んでおり、必ずしも科学的な研究に求められるような再現性があるわけではない。しかし、一人で悩みを抱えず皆で経験を共有することで解決の糸口を見つけ出すこともできるのではないだろうか。たとえ解決しなくとも、その悩みを共有し理解してもらえる仲間が見つかることはとても心強いものだろう。そして、この共有のプロセスを経ることで倫理的思考のバリエーションを著者だけでなく読者も獲得でき、よりよい看護を指向する一助となり、ひいては看護倫理学という学問の発展にも役立つのである。か

つて筆者も、現場での悩みや思いをレターとして2編投稿し、編集委員とのやりとりや、その後の反響で大いに励まされた経験がある。ぜひたくさんの方々に本学会誌に「臨床の声」を投稿していただき、本学会誌を「考え」、「論じ」、「対話」する場としても活用してもらいたい。

4. 交流集会の参加者の声

交流集会では、「レターは実践報告でよいと言われ安心した」、「交流集会に参加して、パワーをいただいた」、「学会誌に、臨床の問題が求められていることを感じた」、「今回参加して、論文投稿のハードルが下がった」、「学会誌は雲の上の存在で編集委員の顔が見えなかったが、決してそうではないということがわかってとても身近に感じた」、といった声が聞かれ、交流集会開催の目的が十分に達成されたことを実感した。反面、投稿に関するいくつかの質問もあり、実践者の論文投稿には臨床に身を置く実践者ならではの問題が存在することも明らかになった。これについては次節で触れる。

5. 実践者が論文作成や投稿で抱える問題

交流集会では参加者から、「院内研究のときに一緒に見守ってくれ、相談できる人が必要だった」、「臨床にはサポートしてくれる人がいない」、「編集委員は書き上がった論文を見るが、書いているときにサポートしてほしい」、「タイムリーに指導してくれる人がほしい」、「スタッフが書くことに慣れていない。書いても普通のレポートになってしまう。アドバイスがほしい」、「臨床にはネタはあるが、どうまとめていいか、迷っている間に時間が過ぎてしまう」、「院外の看護研究を指導してくれる先生とは、時間の調整が難しく、テーマの段階から、指導していただきたい」といった意見が寄せられた。つまり、忙しい臨床現場で、タイムリーに相談に乗って指導してくれる人がいなければ、ネタはあっても論文として書くことは難しいということである。

また、別の意見として、「研究計画書を書いて、院内の倫理審査委員会を通すのが面倒だし、躊躇する」といった意見が聞かれた。実践報告や所感をレターで投稿する場合には、必ずしも倫理審査を要するものではない。しかし、この意見は単に倫理審査受審の煩雑さや手間だけでない問題が含意されているのではないかと推察する。筆者の経験や見聞きするところでは、病院や施設の倫理審査の過程では、研究対象者保護の観点ではない理由で研究方法などの変更を求められることがあると聞く。さらに、共同研究者ではない上司の指導を受けなければ作成した論文を発表することも投稿することもできないといった事態も起きているようだ。もちろん、倫理審査を受審し倫理的に配慮された

研究であることは大前提であるが、危惧されるのは臨床での具体的かつ臨場感ある記述や論文執筆者の赤裸々な想いがその指導によって改変される可能性があることである。論文は著者だけでなく査読者という他者が関わることでよりよく作り上げられていく。よい論文を作るためには、他者の存在を外すことはできないと言えよう。しかし、とりわけこの他者が同僚として行動する査読者ではなく、それ以外の目的をもって介入する他者であった場合にはその論文のよさが消え失せてしまう可能性がある。推察の域を出ない考えではあるが、このような事態によって実践者の投稿が阻まれているのであれば由々しき事態である。この点については今後も注視していく必要がある。

前述したような問題のほかにも、そもそも投稿論文の書き方がわからないといった意見が会場から寄せられた。確かに論文作成にはルールやお作法が存在し、訓練を受けた人でなければ一筋縄ではいかないのも事実である。そのために本学会誌では投稿の手引きや投稿テンプレートを作成し、なにを、どのように、どこに書くのかをわかりやすく解説し、投稿してもらいやすい環境の整備にも努めている。

6. おわりに

臨床には非常に多くの「気づき」がある。それぞれの多くの「『気づき』をどう行動に移せるか」が、看護倫理の今後の発展に寄与するであろうことを小西¹も論じている。日々臨床で巻き起こる疑問、困難、悩み、悲しみ、うれしい経験はただの気づきではなく、何らかの倫理的背景を包含しているはずである。この気づきを論文として昇華させることで、たくさんの仲間との間に「考える」ことや「論じる」こと、そして「対話」が生まれ、よりよい看護への道しるべとなる。そして、さらにたくさんの「経験」が積み重なれば、看護倫理という学問も成長を遂げることができらう。今後も、編集委員として投稿された論文に対して最大限の支援を行い、今回明らかになった問題解決に向けて行動していきたい。

謝 辞

交流集会の開催や本論文の執筆にご協力いただいた日本看護倫理学会編集委員会の坂田三允先生、田中高政先生、足立智孝先生、八代利香先生、山田聡子先生に、そして、交流集会で活発に意見交換してくださった参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

助 成

本論文はどの機関からも研究助成を受けていない。

利益相反

本論文における利益相反は存在しない。

文 献

1. 小西恵美子. 日本の看護倫理のあした. 日本看護倫理学会誌. 2012; 4(1): 1-2.
2. 日本看護倫理学会編集委員会. 日本看護倫理学会誌の査読について. 2013年8月26日.
3. 田中高政. よりよい論文を生み出すための著者・査読者・編集者の協働. 日本看護倫理学会誌. 2012; 4(1): 49-51.
4. 大出順. 尊厳とQOL—一つの事例を通しての考察—. 日本看護倫理学会誌. 2012; 4(1): 43-45.